

昭和三十年度事業報告

(昭和三十年四月—昭和三十一年三月)

毎年増加してゆく利用者数 ● ● ●

昭12 129,201人 (戦前最高)

昭26 235,560人

昭27 312,996人

昭28 304,741人

昭29 343,157人

昭30 359,599人

(本館・市内三分館集計)

京 都 府 立 図 書 館

京都市左京区岡崎成勝寺町 9 電・吉田(7)0069・2450

一、概況

昭和三十年度の当館利用者数はさらに増加し、新記録を作った。特に岡崎本館では、三・四月以外は館にふれる利用者の行列ができ、最もはなほだしい時は開館前から一日申行列が絶えなかつたほどである。このような利用要求の増加に反して現在の本館舎は建築以来すでに半世紀に近く狭隘かつ腐朽がいはじりしい。このため昭和三十一年三月六日、京都大学名誉教授新村出、京都博物館長神田喜一郎など八氏によつて、京都府立図書館本館の新築・移転に関する請願書（約二万五千人の賛成署名簿を添附）が京都府会に提出され、文教委員会では慎重審議の結果本会議において請願の趣旨を了として採択された。新しい構想にたつすぐれた図書館の実現は多数府民の待望するところであるが、その方向に一步を印したものとえよう。

市内分館、地方分館、貸出文庫もそれぞれ成績をあげ、国庫補助金により「青年学級文庫」が購入された。

二、館内利用者（本館および市内三分館）

本館および市内三分館における本年度館内利用者総数は約三十六万人で昨年度より四・七パーセント増加している。一日平均利用者数は千三百人に近い。

年 度	利用者総数（人）	一日平均（人）
昭和十二年（戦前最高）	一一九、二〇一	三九〇
昭和二十七年	三一一、九九六	一、〇一九
昭和二十八年	三〇四、七四一	一、〇九七
昭和二十九年	三四三、一五七	一、二二五
昭和三十年	三五九、五九九	一、二八三

三、館外貸出冊数（地方六分館および貸出文庫）

地方六分館および貸出文庫において団体に対し長期貸出を行っている。本年は昨年度より十九パーセントの増加を見た。

年 度	貸出冊数（冊）
昭和二十七年	六一、二八〇

昭和二十八年	七七、四四三
昭和二十九年	八四、三〇七
昭和三十年	一〇〇、一一三

これらの長期貸出図書は各冊平均約三人の手を経て読まれるから、この分の本年度利用者総数は約三十万人と推定される。

四、京都市内四館の利用者の内訳

利用者数	利用冊数	開館日数	一日平均利用者数
本館 三、四五六	三、七〇六	二七〇日	八〇人
伏見分館 二、八六〇	三、九五五	二八〇日	一三三人
河原町分館 三、〇三三	三、六三三	二七〇日	一三三人
上京分館 三、〇三三	三、〇三三	二七〇日	九人
計	一、三六九		

これを男女別で見ると、

性別	本館	伏見分館	河原町分館	上京分館
男	七二%	六四%	八八%	七九%
女	二八%	三六%	一一%	二一%

また一般人と学生とにわければ、

性別	本館	伏見分館	河原町分館	上京分館
一般	二一%	一六%	六〇%	二一%
学生	七九%	八四%	四〇%	七九%

五、利用図書の内容

岡崎本館の本年度の利用冊数は約三十三万冊で、一日平均千八百八十三冊、一人平均一・四冊となる。それを図書の分類別に見ると次のようである。

分類	総記	歴史地理	哲学宗教	社会科学
割合	二・九%	九・〇%	三・〇%	一〇・七%

自然科学	一二・二%	工学	三・九%
産業	一・七%	芸術	三・二%
語学	四・七%	文学	一七・二%
児童図書	二一・一%	新聞雑誌	一〇・四%

六、蔵書冊数

昭和三十年度末における当館の蔵書冊数は二十四万冊をこえ、配置別は次のようである。

本館	一九〇、四八〇冊
貸出文庫	二〇、三一六冊
伏見分館	五、四九四冊
河原町分館	四、一三〇冊
上京分館	三、七八二冊
峰山地方分館	三、六四二冊
宮津地方分館	三、六二四冊
綾部地方分館	三、五四六冊
園部地方分館	二、一五九冊
北桑地方分館	二、一八一冊
木津地方分館	二、一七九冊
計	二四一、五三三冊

本年度における増加図書数は六千三百三十二冊（購入二五、一六五・受贈二三六一・編入受入二七六七・数量更正による増加二六・その他二三三）に対し毀損などによる除籍図書数は八百七十一冊であつて、昨年度末より五千四百六十一冊の純増であつた。

七、開架圖書の利用状況

岡崎本館では大閱覽室および学生室の一部に開架書架を設けて新刊書・基本図書・雑誌をおき、児童室に完全開架制を行っている。

本館の開架図書冊数は

大閱覽室

約一万冊

学生室 約三千冊
児童室 約三千冊

開架圖書の利用は非常に多く、本館における成人の利用冊数では約八割を占めている。なお、本年度は新刊書展示棚を整備した。

八、読書相談奉仕

読書相談室が開かれて約四年を経たが、利用者の質問・相談に答え便益を与える実をあげて来た。本年度の相談件数は次のようである。

口頭	一一、六八九	電話	二、五五六
郵便	一七〇	計	一四、四一五
開室日数	二七七	一日平均	五二・〇

この業務を充実するために、京都府下の関係各機関との連絡を進めている。また、文献目録の編集、貴重図書・特殊資料の保管・利用、展示会の開催、図書館見学者の案内、特許庁発行の公報類の整備などを行つている。

九、特許庁発行公報類の整備

現代産業界の重要資料である、特許庁発行の「特許」「実用新案」「商標」「意匠」などの公報類の寄贈は昭和二十五年以来中絶していた。当館は先年来特許庁に対し、京都において公報類が必要な実情をのべ寄贈復活を求めたが、本年四月これが認可され二十五年以後の分が送附された。送附冊数は昭和二十五―二十九年分二千二百余冊、昭和三十年分五百六十余冊である。これを分類別に仕分け、製本し、各界に呼びかけて利用に努めている。

十、児童室

児童教育のためによい読書環境を作ることにはきわめて大切である。当館の児童室は京都で少いこの種施設の一つである。本

年度の利用児童は二万二千二百二十四名、男児・女児比率は六十パーセントと四十パーセントである。

附近の児童から図書委員を選んで児童室運営に協力してもらっている。

十一、分館

(1) 伏見分館（昭和二十五年二月開設）

伏見地区は岡崎本館から約八軒はなれ、分館の必要性が明瞭である。この分館ははじめ他の建物の一部を借りて発足したが、地元から土地・備品の寄附があり約四百五十万円の府費支出を得て、昨年七月約百坪（うち閲覧室六十四坪）の新館舎が落成した。新館の快適さによつて、本年度の利用者は約六万三千名と昨年度より十三パーセントの増加を示した。将来洛南地区の文化センターとして愛用される日が期待される。

(2) 河原町分館（昭和二十四年六月開設）

京都市の繁華街河原町通に面する丸善京都支店の地階約三十坪を借りている。新刊の小説・随筆・新聞・雑誌を本位として完全開架制をとり、「市民の楽しい読書室」を目ざした異色ある分館である。常に満員の盛況で本年度利用者は四万人に余り、学生以外の一般人が六十パーセントを占めるなど開設の目的が成功したものである。

(3) 上京分館（昭和二十六年四月開設）

京都市北部地区も岡崎本館から遠く、ここに上京分館が設置され活動して来た。最近、これまで借用していた紫郊会館の都合により移転の必要が生じた。この際、分館の充実を期して種々検討した結果、北区・右京区・上京区からの交通に便利な北区等持院東町に適当な所を見出した。新館舎は建物約六十五坪、座席約八十で四月下旬ごろに移転・開館の予定である。

(4) 地方分館

昭和二十五年に峰山・宮津・綾部三館、次で同二十七年に園部・北桑・木津三館が開設され現在六館である。これらの地方

分館は、地域内の公民館・婦人会・青年会・読書会などの諸団体に對し三十冊乃至五十冊を期間一ヶ月で団体貸出するものである。なお本年より文部省国庫補助金（本年度は十二万円）を得て「青年学級文庫」を購入し、地方六分館および本館貸出文庫に配して「青年学級」の読書活動を援助することとなつた。

館名	利用団体数(団体)	利用冊数(冊)
峰山地方分館	六四六	一九、九八二
宮津地方分館	四九八	一七、九五二
綾部地方分館	五七一	一七、九二五
園部地方分館	三三七	一三、一六一
北桑地方分館	三八四	一一、六三五
木津地方分館	六〇四	一一、六八一
計	三、〇四〇	九三、三三五

十二、貸出文庫（本館附属）

本館内にあり、主として京都市内および近郊の団体に対する貸出を行っている。本年度における利用団体数は百七十八団体、利用冊数は六千七百七十八冊である。

十三、印刷物

本年度の主な印刷物は次のようである。
「京都府立図書館要覧」 当館が各方面で、府民へのサービスに努力している姿を紹介したもの。
「京都府立図書館本館の移転・改築試案」 岡崎本館の利用状況から見てその改築が切実である事情、およびその機会に市内中心部へ移転してより便利な充実した図書館を建設したい構想をのべたもの。

十四、経費

本年度諸経費は約一千六百二十二万円で内訳は次のようである。

人件費	約 一、二〇六万四(七四・三%)
図書館資料費	約 二四六万四(一五・二%)
定期刊行物	約 一六六万四
その他諸経費	約 一七〇万四(一〇・五%)

なお本年度末における館員数は、主事二十五名、主事補二十名、備人一名、臨時職員七名、計五十三名である。